

職業レディネスと職業アイデンティティの関連

看護専門学校の3学年の比較

関西看護専門学校 山崎裕美

I. はじめに

看護専門学校の役割は、専門職業人として看護実践を通して社会に貢献することのできる人材を育成することである。しかしA看護専門学校では、近年就職試験時期の直近でも就職先を決められない学生が増加傾向にある。白鳥¹⁾は看護学生は最終学年の前半までに職業レディネスは低下することを明らかにした。これは専門教育や実習体験によって職業同一性が拡散に向かうことが推測されると述べている。

そこで本研究はA看護専門学校3学年を対象に学年進行に伴う職業レディネスと職業アイデンティティの比較を行うとともに就職時期の学生の職業レディネスと職業アイデンティティとの関連を明らかにし就職支援の一助としたい。

II. 用語の定義

職業レディネスとは、就職を控えた学生が職業に就くことに対する成熟度と若林ら²⁾は述べている。

職業アイデンティティとは職業人としての自己をどのように決定し、どのように維持していくかを時間軸の中で意識的・無意識的に操作し、職業自己の感覚をいかに獲得していくかという発達の概念であると吉津³⁾は述べている。

III. 研究方法

対象者 A看護専門学校3年課程

1年生91名 2年生89名 3年生81名

合計261名

調査期間:平成26年10月20日から23日の間で学年ごとに実施した。

調査内容:質問紙表を用いて集合調査で行った。

「職業レディネス尺度」²⁾は5つの下位概念で構成された30項目を採用し「医療系学生用職業アイデンティティ尺度」⁴⁾は4つの下位概念で構成

された20項目を用いた。いずれも5段階尺度で評定を求めた。それぞれの学年別平均点の比較、職業レディネスと職業アイデンティティとの関連および職業レディネス下位尺度のうち学年進行に伴い低値を示したものについて考察を行った。

IV. 倫理的配慮

対象者には文書で研究の趣旨、内容や方法、匿名性の確保、研究データなど入手した情報は厳重に取り扱うこと説明した。

V. 結果および考察

1. 職業レディネスと職業アイデンティティの平均点3学年の比較

1) 職業レディネスは学年が上がるにつれ高くなっている。表1参照。白鳥¹⁾の研究は4月に行っており3年時は実習前の不安が影響していると考えられていた。今回は10月に調査をした。この時期の3年生は実習終盤に差し掛かり、就職先を決定する時期である。その為就職を現実的なことととらえ自分のやりたいこととやれる可能性について真剣に考えておりレディネスが高まったと考える。

2) 職業アイデンティティは学年が上がるにつれ低くなっている。表2参照。アイデンティティは自己肯定感や自己受容、自己価値などによって自己の存在感を確認しながら獲得していくものである。1年生は見学実習が主となり2年生も10月までは技術習得の実習のみ行っているため自己を見つめる機会が少ない。しかしながら3年生になると患者や医療者と関わる頻度が高くなり、失敗体験や対人関係のトラブルなどから自分を否定的にとらえアイデンティティの混乱が生じる。そのために3年生では職業アイデンティティが低下したと推測する。

表1 学年別職業レディネス平均点

1年生	2年生	3年生
76.34	77.13	78.07

表2 学年別職業アイデンティティ平均点

1年生	2年生	3年生
71.79	70.29	69.33

2. 職業レディネスと職業アイデンティティの関連

前述のように学年進行とともに職業アイデンティティは低い結果がでたが、職業レディネスと職業アイデンティティの相関を調べると職業レディネスの高い群は低い群に比べ職業アイデンティティは高い ($P < 0.05$) (図1参照) という結果が得られた。この結果より職業アイデンティティが確立できている学生は職業レディネスも成熟していると言える。

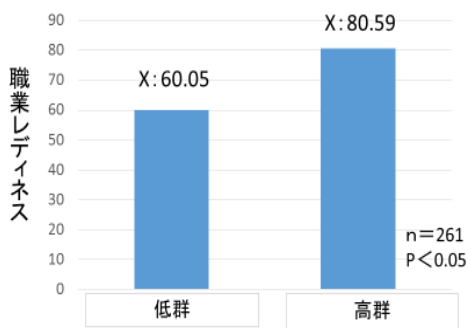


図1 職業アイデンティティと職業レディネスの関係

失敗体験や様々なトラブルを抱えながらも乗り越えた学生はその過程において職業アイデンティティの確立に向かっており職業レディネスも成熟傾向にあることが読み取れる。

3. 3年次の職業レディネス「選択の主体性」と職業アイデンティティとの関連

職業レディネス下位尺度の「選択の主体性」と「自己知識の客観性」は学年進行とともに平均値が低下している。(表3参照) ここでは平均差が大きい「選択の主体性」について考察する。

「選択の主体性」は他者の意思でなく自分の

表3 職業レディネス下位尺平均点

	関心	限定	現実性	主体性	客観性
1年	22.02	18.75	15.24	20.33	21.76
2年	23.04	18.66	15.47	18.46	21.64
3年	23.80	19.59	15.64	18.96	21.14

選んだ職業にどれだけ責任を持てるかの度合いを示すものであるが、就職が現実的なこととして自覚する3年生だからこそ仕事に対する責任を感じ自分の選択に迷いが生じるのだと考える。その際教員や親などの意見を聴く機会も多くさらなる迷いが生じていることが推測される。また、A看護専門学校は母体施設を持っており奨学金を借りているものは3年間関連施設で働く返済が免除される。1学年7から8割の学生が奨学金を受けているが入学時は母体施設で働く意思のあった学生が実習などを経験し異なる領域に関心が向き迷いが生じていることが推測できる。

VI. まとめ

3年次の就職時期において職業レディネスが高いものは職業アイデンティティも高いことがわかった。しかしながら職業アイデンティティの確立が不十分な学生は職業選択に自信がなく職業レディネスも揺らぐ。また経済面や他者の助言により職業選択に迷いが生じる。そのため個々の現状を把握し支援する必要性がある。

V. 引用・参考文献

- 1) 白鳥さつき (2002) 看護学生の職業社会化に関する研究 山梨医大紀要 第19巻 25-30
- 2) 若林満 後藤宗理ほか (1983) 職業レディネスと職業選択の構造—保育系・看護系・人文女子短大生における自己概念と職業意識との関連—名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科—30, 63~98
- 3) 吉津紀久子 (2001) 橡教育センター研究集録 1-11
- 4) 本多陽子 落合幸子 (2006) 医療系大学生の進路決定プロセス尺度の作成試み 茨城県立医療大学紀要 第11巻 ASVPI Volume11